比較構文に出現する程度副詞について
――「さらに」の分析を中心に――

林　奈緒子

キーワード：程度副詞，比較構文，比較基準の明示

0．はじめに

比較構文に出現する程度副詞、特に渡辺実（1990）における「もっと類」[1]に関しては、奥村（1995）、渡辺史央（1996）、佐野（1998）によって、興味深い主張が提示されている。三稿は比較構文に出現する程度副詞が一様に捉えられるものではなく、その違いを「前提」という概念を援用することによって説明している点で共通している。佐野によると、渡辺（1990）の「もっと類」はさらに「もっと」類と「ずっと」類に下位分類される。

（1）「XはYより〈程度副詞〉A」において、
「もっと」類（もっと、更に、一層）：「YもAである」という前提を持つ
「ずっと」類（ずっと、はるかに、断然[2]、よほど）：「YもAである」という前提を持たない（佐野 p109）

（1）における主張そのものの妥当性を問うものではないが、佐野の「もっと」類と「ずっと」類、さらに「もっと」類の中でも「もっと」と「さらに」「いっそう」との間には、どのような構文において比較がなされるか、という点に違いが見られる。

（2）　かわいそう、と三郎は私のことを言ったが、ほんとうにかわいそうなのは、本城さんだった。……
　こうなったのはだいたいにおいて私のせい、ということを思い出すと、涙にかきくれているわけにもいかなくなり、仕方なく失笑したりしてしまう。そして、本城さんを　＊ずっと／＊よほど／＊はるかに　可哀相な人にさせてしまうのではあった。（物語 p48 改[3]）

「ずっと」「はるかに」「よほど」は、比較対象が明示されなければならないという制約をもつ。（2）に「これまでより」という比較対象を加えると、「ずっと」「よほど」「はるかに」の出現が許容されるようになる[4]。

（3）　かわいそう、と三郎は私のことを言ったが、ほんとうにかわいそうなのは、本城さんだった。……

こうなったのはだいたいにおいて私のせい、ということを思い出すと、涙にかきくれているわけにもいかなくなり、仕方なく失笑したりしてしまう。そして、本城さんをこれまでより　ずっと／　よほど／　はるかに　可哀相な人にさせてしまうのではあった。（物語 p48 改）

一方、「もっと」「さらに」「いっそう」の場合は、比較対象が明示される必要はない。以下の（4）（5）では、比較基準「Y より」が明示されていない。

（4）　「何かをわかっているということと、それを目に見えるかたちに変えていけるということは、また別の話なのよね。そのふたつがどちらも同じようにうまくできたら、生きていくのはもっと簡単なんだろうけど」（神の p173）

（5）　完全に、温の分が悪い。彼は愛車を奪われた衝撃を穴埋めできないまま責められ、　さらに／　いっそう　情けない状況にはまりこんだ。（サマーp67 改）

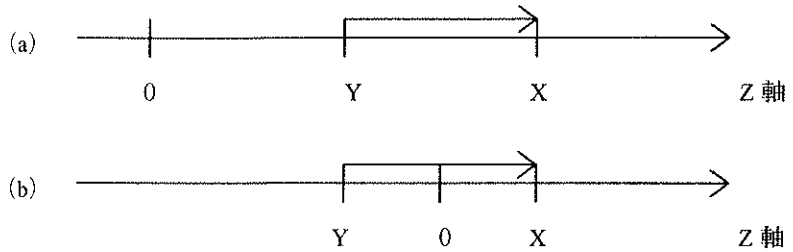
（4）（5）は、比較基準が明示されていないからといって、比較がおこなわれていない、すなわち（4）（5）が渡辺（1990）の「計量構文」であるということはできない。（4）（5）にはそれぞれ、「今より」「これまでより」という比較基準を明示することが可能であり、また比較基準を明示した文の文意ももとの文とかわらない。

本稿では、比較対象が明示される必要のない「もっと」「さらに」「いっそう」「いちだんと」[5]について、どのような場合に比較対象が明示されず、どのような場合に明示されるのかという点を中心に記述・分析を試みる。その際、「さらに」に関する記述を中心に据え、「さらに」との差違という観点から「もっと」「いっそう」「いちだんと」の記述を進めてみたい。

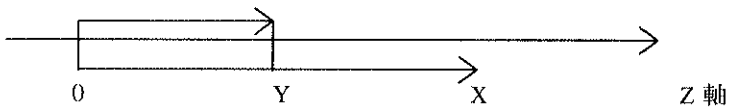
1．先行研究における「さらに」の位置づけ

渡辺実（1990）では、先に注で触れたとおり程度副詞を４つに分類しており、「さらに」は「比較構文」（「X は Y より――A だ」）に出現するが「計量構文」（「X は――A だ」）には出現しない程度副詞として「もっと類」に分類されている。さらに、奥村（1995）、渡辺史央（1996）では、「ずっと」「もっと」の違いを、その前提とするところが異なるとされている。

（６）「ずっと」[7]　　（奥村 p96）



（７）「もっと」



すなわち、「ずっと」「もっと」は、「X が Y より〈程度副詞〉Z」という構文に出現した場合に、「もっと」が「Y も Z」を前提とするのに対して、「ずっと」は「Y も Z」を前提とする場合もしない場合もあるという違いをもつという。そして、渡辺では「さらに」が「もっと」と同様の前提を必要とするものとして挙げられている。

佐野（1998）では、渡辺実（1990）の「もっと類」が、同様の観点から二つに分類されることが指摘されている。

（８）「X は Y より〈程度副詞〉A」において、

「もっと」類（もっと、更に、一層）：「Y も A である」という前提を持つ

「ずっと」類（ずっと、はるかに、断然、よほど）：「Y も A である」という前提を持たない

（佐野 p109（１）を再掲）

佐野においても、分析の中心は「ずっと」「もっと」であって、「さらに」は「もっと」類に分類されているのみである。しかし、奥村、佐野でも指摘されているように、「もっと」には（8）とは異なる「否定的用法」というものがあり、「もっと」類の各項目を言い換えた場合の許容度は、「ずっと」類の場合に比べて低い。殊に、「もっと」と「さらに」との言い換えには、一定の制約が存在する。以降において、どのような場合に言い換えが可能であってどのような場合に可能でないのか、また言い換えが可能である場合に、どのような制約があるのかという点を記述してみたい。

2.「さらに」の分類

「さらに」の表す意味は、おおよそ以下に挙げる4つに分類される。

（9）Ⅰ：　比較構文「XはYより〈程度副詞〉A」において、X=「ある事物」、Y=「X以外の事物」の場合。「さらに」は「XがAである程度」（以下A(X)と略記する）と「YがAである程度」（A(Y)と略記する）を比較し、A(X)>A(Y)であることを表す。

Ⅱ：　比較構文「XはYより〈程度副詞〉A」において、X=「ある時点でのある事物」、Y=「それ以前の時点での同一事物」の場合。「さらに」は「XがAである程度」と「YがAである程度」を比較し、A(X)>A(Y)であることを表す。

Ⅲ：　「さらに」が量の累加を表す場合。

Ⅳ：　「さらに」が事態の累加を表す場合。

以下でそれどれの場合について、検討を加えてみたい。

3．Ⅰの場合

（10）Ⅰ：　比較構文「XはYより〈程度副詞〉A」において、X=「ある事物」、Y=「X以外の事物」の場合

Ⅰの場合、「さらに」は「XはYより〈程度副詞〉A」という構文の〈程度副詞〉の位置に出現する。以下の例においては、それぞれXは「男性」（例（11））「その橋」（例（12））

「それ（地震）」（例（13））であり、Yは「白タク」（例（11））「前のもの（前の橋）」（例（12））「先月の神戸の大地震」（例（13））である。

（11）　「高くねえよ」白タクが男性に向かって怒鳴ると、男性は白タクよりもさらに大きい声で「高いやい、だいたいおまえ法律違反だ訴えてやる」と答えた。（あるような p20）

（12）　木でつくられた、人ひとりしか通れない幅の橋だった。川の氾濫で、あっけなく流されたのである。じきに新しい橋が架けられたが、その橋は前のものよりもさらに狭く、おまけに手すりがない。（あるような p120）

（13）　とてもとても大きな地震です。地震は２月１８日の８時半頃に東京を襲うことになっています。つまり３日後ですね。それは先月の神戸の大地震よりも更に大きなものになるでしょう。（神の p133）

先行研究で「比較構文」として取り上げられるのは主にこのＩの場合である。（11）～（13）には、「X はＹより〈程度副詞〉A」のすべての要素が現れている。したがって、このタイプの文には、「もっと」「いっそう」「いちだんと」「ずっと」「よほど」「はるかに」のいずれもが出現可能である。

（14）　木でつくられた、人ひとりしか通れない幅の橋だった。川の氾濫で、あっけなく流されたのである。じきに新しい橋が架けられたが、その橋は前のものよりも　もっと／　いっそう／　いちだんと／　ずっと／　よほど／　はるかに狭く、おまけに手すりがない。（あるような p120 改）

Ｉの場合に「X はＹより〈程度副詞〉A」のすべての要素が現れるのは、必然的であろう。比較というものが、X、Y という異なる事物間でおこなわれるのであるから、要素の省略がおこなわれては、何と何との間で比較がおこなわれているのかが判然としない。

なお、（11）～（13）の文への出現が許容されるという意味ではいずれも一様に捉えられるが、「さらに」「いっそう」「いちだんと」には、他の「もっと類」の程度副詞には見られない制約が働いている。（11）～（13）はいずれも X が時間的に先行する事物、Y が時間的に後続する事物の例であるが、「さらに」「いっそう」「いちだんと」は、時間軸を遡っての比較ができない。

(15)　もとの橋は新しいものより　＊さらに／＊いっそう／＊いちだんと　狭かった。

(16)　もとの橋は新しいものより　もっと／　ずっと／　よほど／　はるかに　狭かった。

4．Ⅱの場合

(17) Ⅱ：　比較構文「X は Y より〈程度副詞〉A」において、X＝「ある時点でのある事物」、Y＝「それ以前の時点での同一事物」の場合

Ⅱの場合というのは、X、Y が異なる時点での同一事物である場合であり、文全体ではある事物の時経過に伴う変化をも表すこととなる。以下の例ではそれぞれ、「おばあさん」「(姉の) 獣のような荒く暖かい息づかい」「姉」について、二つの時点での状態を比較しているものである。

(18)　「持って帰るんですかい」おばあさんはしかし、怒る様子でもなく、静かに訊ねた。……

「それじゃ、その花、私にくださいな」おばあさんはさらに静かに言った。(あるような p85)

(19)　姉の息づかいが大きくなる。私の息づかいなのか姉の息づかいなのか区別がつかない。獣のような荒く暖かい息づかいがさらに大きくなる。先を行く姉が、いったい姉なのか姉ではない見知らぬ大きな獣なのか、わからなくなる。(物語 p202)

(20)　風の音に邪魔されて、姉の声はへんなふうにふくらんで聞こえた。

「いつって、今のものでしょう」答えると、姉はさらに間延びした声で、

「今って、何の季節だっけ」と言う。(物語 p174-175)

「X は Y より〈程度副詞〉A」において、X＝「ある時点でのある事物」、Y＝「それ以前の時点での同一事物」であるということは、(A(Y)) から (A(X)) への変化を含意する。ある事物の変化以前の状態に伴う程度 (A(Y)) と変化後の状態に伴う程度 (A(X)) を比較しているので、比較基準「Y より」は明示されない傾向にある。とはいえ、「Y より」が

明示されると許容できないというわけではなく、(18)～(20)の文には、「先ほどより」「これまでより」など比較基準を明示することができ、比較基準が明示されれば「ずっと」「よほど」「はるかに」といった比較基準の明示を要求する程度副詞の出現が許容される。

(21)　姉の息づかいが大きくなる。私の息づかいなのか姉の息づかいなのか区別がつかない。獣のような荒く暖かい息づかいがこれまでより　ずっと／　よほど／　はるかに　大きくなる。先を行く姉が、いったい姉なのか姉ではない見知らぬ大きな獣なのか、わからなくなる。(物語 p202 改)

5.「もっと」の「否定的用法」

Ⅱの場合において、比較基準「Y より」が明示されれば、比較基準を要求する程度副詞(「ずっと」「よほど」「はるかに」)の出現が許容可能であることを確認した(例(21))。では、「はじめに」において比較基準が明示される必要がないとした「もっと」「いっそう」「いちだんと」は、いずれもⅡの場合において「さらに」と入れ替え可能であろうか。

(22)　「持って帰るんですかい」おばあさんはしかし、怒る様子でもなく、静かに訊ねた。……

「それじゃ、その花、私にくださいな」おばあさんは　＊もっと／　いっそう／　いちだんと　静かに言った。(あるような p85 改)

(23)　姉の息づかいが大きくなる。私の息づかいなのか姉の息づかいなのか区別がつかない。獣のような荒く暖かい息づかいが　＊もっと／　いっそう／　いちだんと　大きくなる。先を行く姉が、いったい姉なのか姉ではない見知らぬ大きな獣なのか、わからなくなる。(物語 p202 改)

(24)　風の音に邪魔されて、姉の声はへんなふうにふくらんで聞こえた。

「いつって、今のものでしょう」答えると、姉は　＊もっと／　いっそう／　いちだんと　間延びした声で、

「今って、何の季節だっけ」と言う。(物語 p174-175 改)

いずれの例でも、「さらに」を「もっと」に入れ換えることはできない。「もっと」を用いた文は、与えられた文脈では違和感を伴う。

奥村(1995)では、「もっと」の用法に次の二つがあることが指摘されている。

(25) (a)XはYよりもっとZ

(b)もっとW

ただし、Z：状態，W：動作

このうち、(a)の場合は「Y も Z」を前提とするが、(b)の場合には同様の前提が存在しないという。奥村は(b)の文末が「義務・命令・希望・意志・推量」を表すものに限られるとし、(b)を「現状を暗黙の前提として、その現状からの変化を要求したり予想したりする」（奥村 p99）ものであると特徴づけている。

しかし、佐野（1998）で指摘されているように、「もっと」に（25a)の前提が必要ないのは、なにも（25b)の場合に限られるわけではない。佐野では、「もっと」のこの用法を「否定的用法」とし、さらに検討が加えられている。佐野によると、「もっと」の「否定的用法」とは、「話題になっているY、或いは現状を否定し、Xはそれ以外であること、或いはそれ以上であるということを述べるもの」（佐野 p108）である。佐野で提示されている「もっと」の「否定的用法」の例は、奥村の(b)（「もっとW」W：動作）という形式に限られない。

(26)　私が言っているのはもっと別の問題だ。　（佐野 p109 改 下線は佐野による）

(27) a：彼は 160 センチくらいですか。

b：いいえ。もっと高いですよ。　（佐野 p109 改）

(28)　この店の料理は昔はもっとおいしかった（のに、今はおいしくない)。

(29)　（今はおいしくないが、）この店の料理はもっとおいしくなるだろう。

（ともに佐野 p108 下線は佐野による）

奥村、佐野の両稿によって提示されている「もっと」の「否定的用法」の例を確認すると、すべて比較基準「Y より」が明示されていない。本稿では、比較基準「Y より」が明示されないことによって、「もっと」の解釈が「否定的用法」傾くものとと捉える。

本稿で問題としているⅠの場合というのは、比較の対象である二つの項目（X および Y）が別の事物であり、そのためにXに対する比較基準「Y より」が明示されるのであった。一方Ⅱの場合というのは、比較の対象が同一事物の「現在の状態に伴う程度」と「過去の状態に伴う程度」であり、これは同一事物の時間経過に伴う変化であるとも捉えられるものである。したがって、比較基準「Y より」をあえて明示する必要はない（例（22）～（24））。

このような文脈に「もっと」が出現すると、文脈としては同一事物の時間経過に伴う変化を表すことが要求されるにもかかわらず、「もっと」が現状を否定する「否定的用法」と解釈されるために、与えられた文脈との間に齟齬が生じるものと考える。(22) ～ (24) の例に、「もっと」の「否定的用法」の解釈を排除するよう操作した次の (30) ～ (32) は許容可能である。

(30)　「持って帰るんですかい」おばあさんはしかし、怒る様子でもなく、静かに訊ねた。……

「それじゃ、その花、私にくださいな」おばあさんは先ほどよりもっと静かに言った。(あるような p85 改)

(31)　姉の息づかいが大きくなる。私の息づかいなのか姉の息づかいなのか区別がつかない。獣のような荒く暖かい息づかいがこれまでよりもっと大きくなる。先を行く姉が、いったい姉なのか姉ではない見知らぬ大きな獣なのか、わからなくなる。(物語 p202 改)

(32)　風の音に邪魔されて、姉の声はへんなふうにふくらんで聞こえた。

「いつって、今のものでしょう」答えると、姉は先ほどよりもっと間延びした声で、

「今って、何の季節だっけ」と言う。(物語 p174-175 改)

「ずっと」「よほど」「はるかに」が常に比較基準「Y より」を必要とするのに対して、「もっと」は「否定的用法」の排除を要求する文脈においてのみ比較基準「Y より」を必要とする。

6．ⅢおよびⅣの場合

次に上げる (33) ～ (35) が「さらに」が量の累加を表す場合の例であり、(36) (37) が事態の累加を表す例である。事態の頻度を量として捉えることが可能であるので、ⅢとⅣとの区別は必要ないようにも思われるが、Ⅲにおいて量として捉えられるものが等質であるのに対して、Ⅳにおいて捉えられている事態は異質なものである。区別を設ける所以である。

(33)　女はもう何もつままずにビールだけを飲みながら訊いた。……
女はさらにビールを飲んで、さらにつぎ足した。(蛇 p17)

(34)　ぺこぺこ頭を下げて、少しずつ後じさりした。ニホンザルはにじり寄ってくる。
「謝りなさい」割れがねのような声が響くと、部屋の壁にひびが入った。
さらに後じさりすると、もう一度ニホンザルは「謝りなさい」と怒鳴り、同時に部屋の天井がどさりと落ちた。(蛇 p116)

(35)　「何が近い」重ねて聞く。「変わり目が近い」一人が答え、するともう一人は、「変わり目変わり目」と繰り返す。「何の変わり目」さらに尋ねる。「空気の変わり目」二人同時に答えた。(あるような p23)

(33) では、「ビール」の量、(34) では「後じさりする」距離、(35) では発話の回数という、等質的な量の累加が「さらに」によって表されている。

(36)　つつがなく年月は過ぎたが、曾祖母が死に五人の子供たちが育ちさらに孫が生まれ体がきかなくなってから、突然出奔していたときのことを話すようになった。(蛇 p27)

(37)　「元気？」本城さんは、ウェイトレスにコーヒーを頼みながら持っていた文庫本をばらばらとめくり、しおりを反対向きにしてから表紙を眺め、さらに裏表紙を少し磨いた。(物語 p65)

「さらに」は、(36) では「曾祖母が死ぬ」「五人の子供たちが育つ」という事態への「孫が生まれる」という事態の累加を表しており、(37) では「ウェイトレスにコーヒーを頼みながら持っていた文庫本をばらばらとめくる」「しおりを反対向きにしてから表紙を眺める」という事態への「裏表紙を少し磨く」という事態の累加を表している。いずれも同じ事態が繰り返されているわけではなく、累加される事態はそれぞれ異質である[8]。

しかし、一方でⅢとⅣとは連続的な側面をもつ。まず、例 (33) を見ると明らかなように、「さらに」が出現する位置は、量を表す数量詞・程度副詞が通常出現する位置とは異なっている。以下の例を参照されたい。

(38) a.　女はさらにビールを飲んで、さらにつぎ足した。

b.　女はビールを2杯飲んで、さらにつぎ足した。

c.　女はビールを少し飲んで、さらにつぎ足した。

d.　女はビールをさらに飲んで、さらにつぎ足した。

(38d) が許容できないわけではないが、相対的には (38a) の許容度の方が高い。また、(39) (40) のように、等質な事態を累加する『さらに』の例が存在し、(33) ～ (35) と (36) (37) との中間的な例として位置づけられる。

(39)　流れがせき止められて、ひとびとが団子のように固まりはじめていた。平面の団子になったそのひとびとの上に、さらに後ろから来たひとびとが重なって、立体的な団子をつくりはじめている。(蛇 p105)

(40)　元締めからだいぶ離れた場所まで歩いていって、少女のかけらをより分け、再生に使えそうな細胞核を取り出した。いつも元締めがやっているように、肘の内側の細胞にマイクロピペットで細胞を注入し、さらに元締めの真似をしてとんぼを三回きった。(蛇 p134)

なお、Ⅲ・Ⅳの場合、他の比較系程度副詞の出現には、次のような制約が見られる。まず、「いっそう」「いちだんと」「ずっと」「よほど」「はるかに」は量を表さないので、Ⅲの場合には出現が許容されない。

(41) a.　女は太郎より　＊いっそう／＊いちだんと／＊ずっと／＊よほど／＊はるかに　ビールを飲んだ。

b.　女は太郎よりビールを　＊いっそう／＊いちだんと／＊ずっと／＊よほど／＊はるかに　飲んだ。

また、「もっと」に関しては、次の例に見られるように、Ⅲの場合にも否定的用法の読みに傾き、「さらに」と同じ文脈には用いられない。

(42)　女はもう何もつまずにビールだけを飲みながら訊いた。……

女は　＊もっと　ビールを飲んで、＊もっと　つぎ足した。(蛇 p17 改)

(43) a.　女は太郎よりもっとビールを飲んで、もっとつぎ足した。

b.　女は先ほどよりもっとビールを飲んで、もっとつぎ足した。

なお、Ⅳの場合にはいずれの程度副詞も出現せず、したがって異質の事態を累加するのは「さらに」に限られる。

7．まとめ

本稿では、「さらに」の表す意味の記述をとおして、渡辺（1990）の「もっと類」の概観をおこなった。まず、渡辺の「もっと類」は比較基準（「X は Y より〈程度副詞〉A」における「Y より」）が明示される必要があるか否かによって、次の二つに分類される。

(44)　比較基準の明示が要求されるもの：「ずっと」「よほど」「はるかに」

比較基準の明示が要求されないもの：「さらに」「もっと」「いっそう」「いちだんと」

また、比較基準（「Y より」）が明示されない場合に「もっと」が佐野のいう「否定的用法」の解釈をされることを示し、そのために「さらに」のⅡの場合（X、Y が同一の事物の「現在の状態に伴う程度」「過去の状態に伴う程度」を表し、文全体が同一事象の状態の変化を含意する場合）に「もっと」が出現しえないことを指摘した。

本稿では、「さらに」に分析の中心をおいて考察を進めたが、個々の程度副詞はさらにそれぞれ個別的な性質を有している。一例を挙げれば、「はるかに」は「X は Y より〈程度副詞〉A」という比較構文（例（45））以外に、(46)（47）のような「～を――（継続期間をもたない）動詞」という文脈にも出現する。

(45)　灯を消した後も、少年の皮膚は、蒼えた光を放って蒼白い。温は詫びるのと、慰めるつもりとで少年の頬を軽く撫でた。彼が想像していたよりも、はるかに冷たくぬれていた。（サマーp32）

(46)　学校は夏休暇にはいったものの、温は毎日のように補講を受け、許容量をはるかに超える情報を脳へ詰め込んだ。（サマーp38）

(47)　２００２年に日本と韓国で共催されるサッカー・ワールドカップ（W杯）の国内放映権を、ＮＨＫと民放各社、通信衛星（ＣＳ）の有料放送スカイパーフェ

クＴＶ（スカパー）が、合わせて１７０億円前後で獲得する見通しとなった。Ｗ杯の国内放映権料としては、６億円だった前回１９９８年のフランス大会をはるかに上回る史上最高額となる。(朝日新聞 00.07.11)

本稿での記述・分析をさらに進めるとともに、個々の程度副詞の個別的性質についても検討を加えることが、課題として残されている。

注

[1] 渡辺（1990）では、「Ｘは――Ａだ」（「計量構文」）に出現するか否か、「ＸはＹより――Ａだ」（「比較構文」）に出現するか否かという観点を中心に据えて、程度副詞を４つに分類している。「計量構文」にしか出現しない程度副詞を「とても類」と「結構類」、「計量構文」にも「比較構文」にも出現する程度副詞を「多少類」として分類している。本稿で分析対象とする「もっと類」は、「計量構文」には出現せず「比較構文」にのみ出現する程度副詞である。

[2] 佐野では「断然」が渡辺「もっと類」に分類される程度副詞として扱われているが、「断然」は「この本は断然面白い。」のように特に具体的な比較対象をもたない場合（すなわち「計量構文」）にも用いられる（渡辺では「断然」は扱われていない）。したがって、本稿では「断然」を分析対象とはしない。

[3] 「改」は引用例文の一部を改変したことを表示する。特に断りがない場合は、もとの程度副詞を他の程度副詞に置き換えているのみである。引用もとの後に「改」とないものは、引用もとの文章そのままを引いている。なお、例文に付された下線はすべて筆者による。

[4] 「ずっと」「はるかに」「よほど」の出現を支えるのは、厳密には比較基準の明示ではない。

太郎の部屋の方が　ずっと／　はるかに／　よほど　広い。

例のように、比較がおこなわれていることを明示する「～の方が」という表現を伴う文には、「ずっと」「はるかに」「よほど」のいずれもが出現可能である。したがって、「ずっと」類の程度副詞の出現を左右するのは、比較がおこなわれていることを明示する文脈か否か、であるとすべきである。本稿で問題としている比較基準の明示という観点は、比較がおこなわれていることを保証するものの一つであると言えよう。

[5] ここでの「もっと」は、佐野（1998）で取り上げられている「もっと」の「否定的用法」である。この問題については後述。

[6] 本稿で「いちだんと」を分析対象にするのは、渡辺（1990）において「いちだんと」が「もっと類」の程度副詞として扱われているからである。

[7] 奥村では、「ＸはＹより〈程度副詞〉Ｚ」という文を、「ＸについてＹを基準にして『Ｚであること』に関して述べたもの」であり、「Ｙを比較基準値、Ｘを言及値と呼び『Ｚであること』の評価軸上に位置付け」たものが図（６）（７）にあたるとする。なお、「『Ｚであること』に関して、それを段階として捉えれば、『Ｚである』とは言えないところがあると考えられる」とし、それを０値と呼んでいる。図の「０」は「０値」を表す。

[8] ここでは同じ動作の反復ではないものを、「異質の事態」と呼んでいる。本稿では「さらに」によって累加されるものが異質であるか等質であるかという観点からⅢとⅣとを区別したが、「さらに」は相互にまったく関連が見出せない事態を累加することはできない。例えば、

太郎は大学に合格し、さらに彼女ができた。

とは言えても、

太郎は大学に合格し、さらに彼女にふられた。

は、特別な文脈に支えられなければ許容されまい。「さらに」がどのような条件の下に事態を累加するのか、換言すれば「さらに」によって累加される事態相互にいかなる関係が認められるのか、という問題に関してはさらなる考察が必要であるが、ここでは問題の提起にとどめておきたい。

例文出典

「あるような」　『あるようなないような』，1999，川上弘美，中央公論新社

「神の」　『神の子どもたちはみな踊る』，2000，村上春樹，新潮社

「サマー」　『サマー・キャンプ』，2000，長野まゆみ，文芸春秋社

「蛇」　『蛇を踏む』，1996，川上弘美，文芸春秋社

「物語」　『物語が、始まる』，1999，中央公論新社（中公文庫）

参考文献

奥村大志　(1995)「『もっと』についての考察」，『日本語教育』87 号，91-102

佐野由紀子　(1998a)「程度副詞と主体変化動詞との共起」，『日本語科学』，7-22

――――――　(1998b)「比較に関わる程度副詞について」，『国語学』195 集，1-14

林奈緒子　(1996)「意味素性による程度副詞の記述」，『筑波応用言語学研究』3，13-26，筑波大学文芸・言語研究科応用言語学コース

――――――　(1997)「程度副詞と命令のモダリティ」，『日本語と日本文学』第 25 号，1-10，筑波国語国文学会

渡辺史央　(1996)「比較性程度副詞『ずっと』『もっと』『さらに』についての覚え書き」，『さわらび』5 号，58-67，神戸外国語大学外国語学部益岡隆志研究室内文法研究会

渡辺実　(1986)「比較の副詞――『もっと』――を中心に」，『学習院大学言語共同研究所紀要』8 号，65-74

渡辺実　(1990)「程度副詞の体系」，『上智大学国文学論集』23，1-16，上智大学国文学会